〔民俗採訪記〕

南島とインドネシアの古葬墓

東　　喜望

はじめに

ヒトはいったい、いつごろから死者を弔うようになったのであろうか。坂本百大氏は少なくとも6万年前には、すでに死者を弔う儀礼が存在したと推定している。

イラクのバクダッドの北400kmにシャニダールという洞窟がある。かつて、この洞窟から明らかに埋葬されたと思われる約6万年前のネアンデルタール人の人骨化石と、その下の土の中からおびただしい花粉の化石が発見されたという。これは当時すでに死者に花を捧げる儀礼のあった証拠であり、またシャニダール人が「霊魂」という抽象観念をもっていたことを傍証していると坂本氏は述べている[1)]。

このころは旧石器時代後期にあたる。坂本氏の指摘のように、この時代、すでに明確な葬制が存在したことはまちがいないようである。ところで、それ以前は、どうなっていたのであろうか。大林太良氏によると、旧石器時代前期に葬制が存在したかどうかは、いまだによくわかっていないという。そして、その存在が明確になってくるのは、中期のころだと指摘している。

その根拠として、氏があげているのは、このころ、ヨーロッパなどで死者を洞窟の中や岩かげに葬った遺跡が多くなるからだという。つまり、洞窟や岩かげは生者の居住する場所であり、同じ場所に死者を葬ったということは死者へのいたわりがあり、葬制が確立していたことを意味しているという。

この時代のフランス、ラ・フェラシーの岩かげ遺跡では石をへこませてつくった墓が発見され、別の土地では、あちこちに掘られた墓穴の周囲を石で保護した墓もあるという。

ロシアの学者オクラドニコフの発見によると、中央アジアのテシック・タシュに、平行に列をなして山羊の骨を並べてつくった墓があったという[2)]。

このような事実から見ても、人類の文化史上、旧石器時代中期には確実に葬制が存在していたと断言してよいだろう。ちなみに、旧石器時代中期とはBC15万年からBC3万4000年ごろにかけての時代である[3)]。

いうまでもなく、人間は、生の終極である死をどのように考えるかによって生の在りようを模索し、その範を志向してきた。だから各地に残る葬墓の形態や死者の葬り方を見ただけ

でも、その地に住む人々の死生観や他界観をかいまみることができる。

私はここ30年余、必要あって薩摩半島の先端に浮かぶ島々から与那国島に至る南西諸島をはじめ、対岸の中国・台湾・朝鮮や東南アジアの各地を踏査した。今年夏もインドネシア四島を調べ歩いた。今、アジアのこれらの地域で得た膨大な資料に埋まりながら、どこから整理すべきか率直に言って考えあぐねている。

ただ、何よりも気にかかるのは各地で実見した葬墓と死の儀礼である。それらのすべてについてふれる時間の余裕はないので、ここでは最も古型と思われる葬墓の主要なものについて、それと出会った体験をもふくめて報告しておきたい。

ただし、古墳墓とはいえ、実見した中国の皇帝や王などの巨大な墳墓、いわゆる「地下宮殿」については、ここでは割愛する。これらの墳墓については、いずれ別稿に託したい。

庶民レベルでいえば、やはり古いかたちの墓は風葬墓だといえるだろう。ただ、これもその葬法から晒葬・崖葬・洞窟葬などに分類されていることをあらかじめ指摘しておきたい。なお、ここにいう南島とは日本の南西諸島をさす。なおまた、ここに記した南島の風葬をめぐって、どんな死の儀礼が行われたかについては不明なところが多く、ここではふれないこととする。

1　葬制への関心

〔野ざらし・水漬く屍－「死」の渕を往く〕

私事にわたり恐縮であるが、私は神戸市の和田岬近くの海辺で生まれた。小学生のちょうどなかば、昭和16年(1941)12月8日、太平洋戦争が始まる。翌17年2月15日、シンガポールが陥落し提灯行列にうかれて、僅か2か月後の同年4月18日、神戸は初空襲を受けた。あちこちに焼夷弾を落とされ、立ちさわぐなか敵艦載機は飛び去ったが、それから間もなく、神戸では強制的に防空壕を掘らされた。やむなく、近所の人々は床下(ゆかした)を掘った。御崎本町3丁目の中ほどを通って今出在家へ向けて東に走る道路がある。その途中に川中町があった。このあたりは当時まだ新開地で、一戸建ての二階家が道路脇にまばらに建っていた。青や茶色のあざやかな文化瓦が目をひいた。ここに住む人々も新築したばかりの家の床下を掘ったのだ。ところがとんでもないやつが出てきた。「野ざらし」である。

松尾芭蕉は、貞享元年(1684)秋、「野ざらしを心に風のしむ身かな」という句を詠んだ。ここにいう「野ざらし」とは、されこうべのことである。芭蕉もまた旅先でいくたびも野ざらしに出会ったにちがいないのだ。

川中町の大通りの路傍に頭蓋骨が長い列をなして並べられ、老婆たちがお線香を立てて一心に祈っていた[4)]。それは痛ましく異様な光景であったが、これが私と「野ざらし」との最初の出会いであった。

川中町は和田岬の根っ子にあたる。岬一帯は遠矢の浜といい、南北朝時代の古戦場でもあ

る。江戸鈴ケ森のように刑場であった可能性もある。白砂のなかに埋められた髑髏たちが永い眠りのなかからたたき起こされたことになる。前月、アッツ島が玉砕し、つづいて翌年サイパン・テニアンが玉砕した。戦況は悪化の一途をたどり、私たちはやむなく、山の手の親戚に家具一切をあずけて、ほんの一時のつもりで疎開した。兵庫駅から鹿児島へ至り、極めて危険な船旅を続けたが、そのことはここでは割愛する。

疎開先は、父母の郷里、徳之島・徳和瀬という集落である。

徳之島とは奄美諸島(5島)の中央にある。中央部に山岳があり、その周辺は広い平野を成しているから農作物のよくとれる豊かな島である。その東岸に島の主要港亀徳港がある。近世期以降「秋徳港」といわれ、俗に「秋津」(方言・アキチュ)とよばれた港である。

新井白石の『南島志』[5] に次のようにある。

> 徳嶋　旧作度九島。国史所謂度感(トカヌ)島。見続日本書紀。在永良部島北。而東北接大島。周廻十七里三町。所属間切三。曰東。曰西目。曰面縄。港三。其東曰秋徳港。港深二町。濶一町。可泊大船三隻。去自永良部島。東北行十八里。而至于此。其西曰大和尓也泊(ヤマトニヤトマリ)。其北曰井之川。西北二港。並皆浅狭大船未易出入。

亀徳から北へ約3キロへだてた隣村が徳和瀬である。島の東岸からおよそ1キロ離れた丘陵地に集落がある。この集落がいつごろ形成されたのかは不明であるが、16世紀以前にすでに存在していたことは、同島伊仙町(旧面縄間切)の永喜佐宮氏旧蔵の古文書『雑書由緒記』[6] によっても確認できる。同書の中に次ぎのような一文がある。

> 嶋入相見得申候大親役之儀琉球首里之侍、譜代高家按司子孫之人探題道之嶋為押役大親役与被名付金之髪(髪カ)指紫鉢巻頂戴之者為給地道之島田畠之内差分ケ嶋方役之用人目指掟筆子(ニも)被下置候。

この一文は、琉球王の臣で首里に住んだ譜代の高家や按司の子孫が、王の命令によって道之島(ここでは奄美諸島)に赴任し、「大親役」をつとめ、給地として田畠を与えられたほか、彼らは島の用人である目指(めざし)や掟(うっち)・筆子(てくぐ)などの役についたことを記している。

上記のあとに彼らの任地とその氏名が記されているが、徳之島については次のように記されている(句読点、引用者補)。

> 徳之島西浅間、宮城。東、大宝山・佐喜真・宮里・白満・宝佐渡・思(?)京。
> 目指、亀津、大勝・池城・浦浜・義真・時・古仲・大和瀬。
> 西目当俱(あたいとも)、島里・池里・池安・真喜里・真喜宝。
> 喜念、前間・兼城・中勝・与名嶺・与名城・喜大智・富里。

上記のうち、亀津地区の目指として赴任し徳和瀬に住んだのが、「義真」（現姓・義間）と「大和瀬」（方言音・フーワシ）である。両家ともに今に残るが、戦前は琉球風の石垣でかこった屋敷であった。

これらの氏族が沖縄からいつ渡ってきたのか、その確実な年月は明らかではない。ただ、この古文書が「万暦年間」以前の事柄として上記のことを記しているところから見ても、この集落が16世紀に存在したことはまちがいない。義真家や大和瀬家が入り込む前に、この地を開墾し、ムラを創建した「アゲレ・ビキ」（東家）がいたからだ。筆者の祖先にあたる。

この集落がいつ頃、ムラ建てしたのか。その創建者がどこから来たのか、それを明かす手だてはないが、いずれにしろ、かなり古いムラであることはまちがいない。

亀徳の南に、現在この島の主邑となった亀津があり、徳和瀬から東岸に沿って、北へ諸田・神之嶺・井之川・下久志という集落がつづいている。亀津から下久志までが旧・亀津町である。

私は、この徳和瀬におよそ1年半住んだ。島の悪童どもに「ヤマトムン（大和者＝都会っ子の意）」と言っていじめられたが、そんな日々のなかで、今までこの島が経験したこともないような大事件が起きた[7]。

昭和19年(1944)6月29日の早朝、この集落の亀徳寄りの沖で轟音がした。村人はこぞって浜へ出た。日本の輸送船富山丸（7000トン）が敵潜水艦の魚雷を受けて轟沈したのだ。体中にやけどを負って亀徳港へ泳ぎついた兵士もいたが、途中の海上で力つきた者が多かった。無数の水漬く屍が島の東岸一帯に流れついた。この時、将兵3657名、船員67名が戦死したという。翌日から亀徳の南側の海岸に丸太が、3か所「井」の字型に組まれた。流れついた遺体をこの中にほうり込みガソリンをかけてもやした。いわゆる荼毘に伏したのだ。黒焔が高々と立ちのぼり辺り一帯は臭気にみちた。陸軍の駐屯兵と島民がこの作業に従事した。しばらくたって、屍の肉片が激波によって裂かれ珊瑚礁の瀬にへばりつき魚がついばんでいるのをいくたびも見た。いたましい光景であった。これが2度目の死者との出会いだといってよいだろう。

その後、私は激しい空襲下を奄美大島名瀬に渡り、郡下唯一の旧制県立中学を受験した。合格はしたものの、連日の空襲で授業はなく、山中の陸軍基地で地雷かかえて敵戦車に体当りする軍事訓練を受けたりした。思えば、死の渕を生きていたわけで、南の島々を訪ねるたびに、自然に葬墓へ関心が向くのも、そんな私の少年期の体験があるからにちがいない。

2　奄美諸島の風葬跡

〔徳之島の晒葬・崖葬・洞穴葬〕

上記の徳和瀬の集落からおよそ1kmほど東に離れた海岸近くに、「ナガショ」「フッキョオ」と呼ばれる畑地がある。この畑地の脇の、石の多い原野や畑の畦の下に人骨が放置されていた。明らかに晒葬の跡で、石垣島のカーラバマ（河原浜）と同様に、亡骸を海に近いこの地

に捨てたのである。つまり、このような葬法を行った人々にとっては、死者の霊魂を浄土へ送ってのちの遺体は何の意味もなさなかったのであろう。それは、チベットのラマ教寺院などで、葬儀ののち遺体を鉈で割り砕いて猛禽類の餌食とする、鳥葬を行う人々と同じ意識であろう。

徳和瀬のこの地に散在する人骨がいつ頃のものかは不明であるが、このような晒葬は最も原始的な葬法とみてまちがいないだろう。

この集落の東一帯は畑地で、その先に白砂の海岸がある。この海岸の南側に「ハマジゴ（浜地川か)」という小川があり、その南に「タンギャ」という墓地がある。白砂の上に七基の石墓が置かれているが、その背後は高い断崖になっている。往昔は、その崖下に人骨が散在していたという。これは明らかに、崖葬墓で、この葬法を停止してのち、崖の前に本土式の墓碑を建てたのである。現存墓碑の最も古いもので「寛政八」年(1796)とあるから、この集落では、おそらく近世初期ごろまで崖葬や洞穴葬が行われていたと考えてよいだろう。

この「タンギャ」の西側に「ハンタ墓」と呼ばれる洞窟墓がある。1968年8月、沖縄国際大学へ集中講義に行った帰り途、徳之島へ立ち寄り、同月31日、この洞窟墓を調査した。周辺はジャングルに覆われ、村びとは亡霊が出るといい、この地をおそれた。

高さ10m近くの大きな洞窟で、内部は一部分、人間が掘さくして広げられていた。洞穴内の崖の上に数個の髑髏が並べられ、その前に人骨が散っていた。明らかに、共同墓地である。木棺や甕(かめ)の遺物は皆無である。この集落には洗骨の習俗はない。これもまた、いつごろまで使われていたのかは不明である。

集落南側の田地に「クニブドー」という棚田があるが、その南の崖下にも小さな洞穴があって、ここにも人骨が散在していた。甕の破片はない。村びとは、特定の洞穴を墓所ときめて、利用していたようである。この村に洞穴は他にもあり、稲作の豊穣祈願や太陽蘇生の正月儀礼をその洞窟の中で行っているからである。

さて、如上の崖葬墓と同類の風葬跡は、亀津南区の海辺近くの崖下にもあり、現地ではこのような墓を「ムーヤ（喪屋)」とか「トーチバカ」と呼んでいる[8]。また、洞窟墓は瀬滝の山中にもあって、1961年8月、この地を訪ねた折は、5〜6個の髑髏が洞窟内の棚の上に置かれていた。当時、島を一周する観光バスの見せ物にもなっていたが、今は廃されたようである。

ちなみに、徳之島では、このような墓所として利用された洞窟を「トゥール」といい、その墓を「トゥール・バカ」という。徳富重成氏の報告[9]によると、徳之島には他に伊仙町中山にも「トゥール」墓があるという。最近まで使用されたもので、改葬して人骨を収めた甕もあるという。

〔沖永良部島・奄美大島・喜界島の風葬跡〕

以下、実見したところでいえば、沖永良部島北岸の集落・畦布の海岸「湾門浜(わんじょうはま)」に崖葬墓

があり（1983年1月3日訪）、奄美大島北部笠利町土浜の鍾乳洞は、いわゆる「トゥール墓」で人骨が散在している。ここから縄文後期以降の土器が出土しているので、この洞窟は最初、縄文人が住居として使用し、後世の人が、のち風葬墓にしたものだという。喜界島には、東北部の志戸桶に崖葬跡がある。奄美諸島については、以上を記すにとどめる。

ついでながら奄美以北の十島にも、このような風葬墓があったのかも知れないが、見つけることができなかった。中世期から寺院があったので、早くから埋葬が行われていたのであろうか。

3　石垣島の晒葬・崖葬・洞穴葬

かつて、私は平凡社の東洋文庫『南嶋探験』[10] の関連資料を調査・収集するためにいくたびも南西諸島を訪ねた。『南嶋探験』の石垣島の条に次のような記事があり、その存在を確認し現状を調べるためである。

> 正午十二時、伊原間村出起シ、西海岸ヲ通リ、三里ニシテ平久保村地内、字河原浜ニ至ル。大和墓・八嶋墓共（とも）云フノ標木アリ。下馬シテ森林ノ中ニ入ル。十歩ニシテ岩窟ノ間ニ人骨アリ。携フ処ノ香花ヲ奠シ、其霊ヲ吊慰ス。之ヲ一周スレハ、二十間余。各所岩洞中ニ砕片数十個ノ人骨、皆是ナリ。一洞僅カニ完全髑髏二個アルアリ。（明治26年8月14日の条）

石垣島は南から北へ広がる島で、南端から北端まで約32km。東から西に向けて最も長いところで、その距離は約20kmである。島の中部から東北に向けてしだいに細くなり、東北部は半島になっている。その半島のつけ根にあたるところに伊原間という集落がある。東海岸から西海岸まで僅か700m。舟をかついで渡したという。

この伊原間から西海岸に沿って北上すると久宇良（くうら）という集落がある。入植地であろう。この間、約7km。さらに2km北上したところに吉野がある。過疎化が進んで今は1軒を残すのみだという。

〔嘉良川の晒葬跡と河良浜の崖葬跡〕

久宇良と吉野の中ほどに嘉良川という小さな川がある。安良（やすら）山と久宇良岳の山麓から流れ出る川が合流して西海岸に注いでいる。この嘉良川が海へ注ぐ辺りの海浜一辺が上記の「**河良浜**」（Kā ra hama）である。

1981（昭和56）年12月24日、吉野の仲座清光氏に案内されて、現地を踏査した。嘉良川の周辺は上流にかけて白砂の丘で、小規模ながら砂丘である。驚いたことに、その砂丘のなかに数個のされこうべがあった。風砂にさらされ、純白で、さながらうち捨てられた玉状の発泡ス

チロールのようにも見えた。そんな髑髏が県道の東5〜6メートルのところにあった。仲座清光氏の語るところによると、嘉良川の上流には、このような野ざらしが無数にあるという。明らかに、これらの髑髏も晒葬された遺骨である。この島でも往昔、屍（遺体）を海辺の川原に捨てたのである。そんな葬法がいつごろから行われていたのであろうか。このことをたしかめる資料はない。

上記の「河原浜」の北側は断崖になっていて、その下部には小さな洞穴がある。その中に少量ながら遺骨があった。崖葬の一種と見てよいだろう。なお、上掲の記事によれば、河原浜の20間余に及ぶ海岸の岩洞各所に遺骨があったというが、今は見い出せない。

ちなみに、河原浜の南岸一帯は、砂浜からおよそ5mの高さまで石垣が積まれていた。仲座氏の教示によって調査したが、誰が何のためにこんな石垣を造ったのか明らかでない。ただ、推測されるのは、「城（グスク）」の一種か旧村落跡であることはまちがいないだろう。

なお、このような風葬跡を八重山諸島では「大和墓」とか「屋島墓」と呼んだ。平家落人の墓と見なしたからである。そのいわれは後述する。

また『南嶋探験』には次のような一文がある。

> 村（注・浮海村）ヨリ西スル数町、樹木天ヲ覆ヒ昼尚ホ暗黒ナリ。一里斗（ばかり）ニシテ川平（かびら）村ノ境ニ至ル。峯ヲ踰レハ、土人倭墓（やまとばか）ト称ス方三間位、切石ヲ畳ンテ荘厳ナル古墳アリ。小棚ヲ繞ラス。方六、七間。是西常央八重山役所長タル時ニ修補シ木標ヲ建テタリト云フ。（明治26年8月16日の条）

上記の「浮海（ふかい）村」は廃村となって今はない（現・富野あたりにあった）。上記の「倭墓」は現・吉原の東方約1.5kmの「山原」（Yamabare）という地にあった洞穴墓である。

喜舎場永珣氏の『八重山民俗誌』下・「大和墓の由来」によると、明治18年9月、八重山役所長西常央が川平を巡回し、役所の書記や杣山筆者（書き役）・村の総代役など、12〜13人に命じて付近に散在する遺骨をここに集めて平家落人の墓として供養した。風葬墓を「大和墓」と称するようになったのも、ここに由来するという。『南嶋探験』の著者笹森儀助が見たのも改修後のこの洞穴墓であることはまちがいないが、道路建設のために破壊されて今はない。ちなみに、その周辺に数百個の墓所があったというが、これも発見することはできなかった。切石で覆った洞穴墓は川平（かびら）にもある。

『南嶋探験』の上記日誌中に次のようにある。

> 午后三時出起。村（注・川平）ノ西北端ナル石崎ヲ巡ル、凡ソ一里半。該岬西南ノ急斜面、海上ヨリ一丈許（ばかり）ニ亦倭墓ト称スルアリ。洞窟中ニ人骨推ヲ為ス。仔細ニ之レヲ検スレハ、皆黒キ壺に入レタルモノ也。土人之レヲ八嶋墓トモ云フ。香花ヲ奠ス。

〔川平の洞穴墓〕

川平集落の北西は岬になっていて、この岬を石崎岬という。岬の西側に弓形に湾曲した美しい海浜がある。今はこれを「底地（すくじ）ビーチ」といい海水浴場として利用しているが、往昔はこの海辺一帯は、洞穴墓や崖葬の墓所だったようである。

底地ビーチの南側に、川平の豪族・仲間満慶山（なかまみつけやま）の墓所がある。これも断崖にある自然の洞穴を墓にしたもので、前面（洞口）はすべて切り石に覆われていて、内部は見えない。この墓を「ヤドピケー」という。これより北へ約1500m先の崖下に、上記のいわゆる「倭墓」がある。周辺の地名、「ザンドゥ原」。

1980年1月5日、川平の仲底寛助氏の協力を得て現地を調査した。これも自然の鍾乳洞を墓所としたもので、およそ三穴から成る。左洞の穴に今も若干の人骨が残されており、甕や青磁の破片が散在する。髑髏はなかったが、甕の破片が存在することは、一度風葬したあと、洗骨して甕に入れ再度ここへ収めたことがわかる。ただ、この墓所をまつる家は不明である。諸家の合葬墓であることはまちがいないが、ここを墓地とした人々の子孫が絶えたか、このような洞穴を墓として利用しなくなったのかのいずれかであろう。

ところで、前述の仲間満慶山とはどんな人物であろうか。岩崎卓爾著『ひるぎの一葉』によると、満慶山は川平の仲間岡（モリ）に居を構え、隣接する獅子岡（モリ）の頂で常に腕を練り、武術をきたえていたという。当時、石垣島は大浜のオヤケノ赤蜂が酋長となって権勢をふるい、南部の豪族長田大主と対立していた。北部の豪族・満慶山は長田大主と帷幄の間柄にあり、赤蜂の攻撃を気づかって武術をきたえていたのである。

武力ではかなわぬと思った赤蜂は、家来を満慶山のもとへ使わせ、長田大主の使者と偽って満慶山を誘い出し、途中の道で家来の伏兵とともに彼を襲い、陥し穴に落として上から突き殺したという。牧野清氏によると、その場所は名蔵湾沿いの「ケーラ崎」だというが、その没年は明らかでない。ただ、後年の家譜『憲章氏家譜』によると満慶山の生年は1467年。15世紀末に没したのはまちがいないので、この頃にもまだ、このような洞穴を墓所とする風葬が行われていたと見てよいだろう。

石崎岬には、底地湾に面して、ほかに2か所、洞穴墓がある。うち1か所は、『南嶋探験』記載の「倭墓」から西方2〜3町のところにあり、他の一つは満慶山の墓の北方にある。地名「蒲田原」。

4　与那国島の洞穴葬跡・晒葬跡と波照間島の崖葬跡

与那国島へは2度訪島した。最初は『南嶋探験』にかかわる調査のためであり、次は1994年度から3ケ年間、実施した文部省科学研究費補助金による共同調査[11]のためである。

与那国島にもまた、石垣島と同様に「大和墓」とよばれる洞穴墓がある。『南嶋探験』に次のような記事がある。

午前十時出起。八嶋墓（大和墓共云フ）ヲ拝セント香花ヲ携ヘ村吏二名・嚮導者一名、十一時、字「ブサン」ニ至ル。別紙絵図ノ如ク、山洞側面ニアリ。位置ハ本村ヨリ南島二十余町、往時源平ノ戦八嶋ニ敗レテ、此地ニ遁レタル人ノ墓ナリト。（明治26年8月2日の条）

〔ハイムトの洞穴墓〕

1980年1月7日、現地訪。与那国島の主邑・祖納から南東へ約2.5km行った山中のジャングルの中にある。地名ハイムト。島の南島へ延びる宇良部山の山稜がいったん切れて、さらに南島へ同山系が続く地点から約350m離れた崖下にある。

主に三つの鍾乳洞から成る。いずれにも人骨と甕・土器の破片などがちらばっているが、ことに右側の洞穴は奥が深く、左曲して深まっている。その洞穴には、手・足の人骨と髑髏が1個あった。窟前に10円銅貨数箇が積まれ、青さびていたが、供具・供物などはなかった。うち捨てられた墓所であるが、上記にいう平家落人の墓たる確証はない。池間栄三氏によると、この地を方言で「ダマトウ・ハガ」といい、その語音の類似から「大和墓」と名づけられたのではないかという（『与那国島の歴史』）。

明治20年ごろまでに、剣・馬鞍・長持様のものなどの遺物があり（須藤利一『南島覚書』）、大正13年ごろには勾玉・丸玉などの遺物も発見されている（山本桂川『与那国図誌』）。この洞穴墓も屍を風葬したあと、洗骨して甕に入れ、ここへ戻したものであることはまちがいない。

〔祖納の晒葬〕

上記共同調査のため1994年12月、与那国島再訪。12月17日、祖納の北西海岸を調査した。海岸一帯は現在広大な墓地で、無数の亀甲墓や破風墓がある。だが、このような墓制は後世になって行われるようになったもので、それ以前、風葬を行っていたのは明らかである。海辺一帯にひろがる岩礁の上に人骨を入れた素焼きの丸い壺が無数に散在しているからである。ここでもまた、屍は岩礁の上に放擲され、海風に晒して白骨となし、そのうち海水等で洗って骨を壺に収めたもののようである。壺は小さく、たとえばその一つの実長は高さ36cm、胴周り52cmである。ほとんど無銘である。ただ、これらの壺は比較的新しいもので、この与那国島が少なくとも近世期まで風葬を行っていたのはまちがいないだろう。

〔波照間島の崖葬〕

翌12月18日、現地調査。波照間島は日本の最南端の島である。東西に長い、ほぼ楕円の形をした島で周囲わずかに14.62kmの小島である。そのほぼ中央部の北側で、海岸より約200m内陸側に行ったところに、「下田原城」と呼ばれるグスク（城）の跡がある。琉球石灰岩塊を乱石積みにした石垣で囲った曲輪が10か所近くある。最も高い所は標高約30m。15世紀～16世紀ごろの城跡と推定されている。

このグスクの最も下の石垣に小さな自然の窪みがあり、ここに人骨や割れた壺があった。風葬後、洗骨して壺に入れたものであろう。沖縄本島の勝連城などにも、このような風葬跡があるという。なぜ、グスクの基層部に葬墓があるのか、一考を要する墓制である。

5　沖縄本島の南部と北部の崖葬

琉球列島最大の沖縄本島にも各所に風葬跡があったと思われるが、ここでは実見した3か所の崖葬墓を記すにとどめる。

〔玉泉洞西の崖葬墓〕

沖縄本島南部に具志頭村という村がある。今もヒンプン（前がくしの屏）のある民家があちこちに残存しているが、この村の東側に有名な「港川原人」の発掘現場がある。断崖の割れ目に18000年前の人骨が放擲されていたのである。ここから約2km北上すると、巨大な鍾乳洞・「玉泉洞」がある。今やこれも観光化され見せ物になっているが、その入口の西側に深い谷間がある。谷底に細い一本の道が走り、その両側には巨大な石灰岩の崖が迫っている。ガジマルの巨木が根を張り、昼なお暗く、いかにも死者の世界といった感じである。谷底の道は雄樋川の上流につきあたるが、この間の両断崖の崖下に累々と人骨が積まれている。今は大半その前面に石を積んで覆っているが、内部をそのまま露出させている所がある。ここも風葬後、洗骨して甕に収めた所で、そんな甕が一部分破損して人骨をこぼしながら、いくつも並んでいる（写真・1）。前川集落など、周辺の集落の人々が、自然の谷間を墓所として利用したものであろうが、いつごろのものかは不明である。

ちなみに、雄樋川を200mほど南へ下ると真暗な洞窟となる。島びとはここを「珍珍洞」という。洞窟の天井から棒状の巨大な鍾乳石が数本ななめにぶらさがっている（写真・2）。その形は男根そっくりで、不妊症の女性がこれを拝みにくるという。脇にウガンジョ（拝所）があった。死と生を共有した、奇妙なくらやみの空間である。

〔本部半島・備瀬の崖葬〕

沖縄本島北部に本部（もとぶ）半島がある。その北端に備瀬という集落がある。今は集落の南側の海岸から300mほど離れた岡の上に、亀甲墓や破風墓をそれぞれの家で造っているが、現墓地の海岸一帯が風葬墓である。この辺り一帯は長い砂浜が続き、その西側に隆起した珊瑚礁の高い崖が続いている。その崖の下が風葬墓である。もっとも、ここは開発されて海洋博記念公園となったため、これらの風葬跡も撤去されたが、その北端に、わずかばかり崖葬跡が残っており、人骨も少量ながら残っている。その場所は、エメラルドビーチの東側にあった児童公園の根っこのところである。

ちなみに、本部半島東の下運天にある有名な〔百按司墓〕も、基本的には、崖葬の一種とみてよいだろう。ただ、崖下の自然の窪みを人工的に加工して墓穴を拡大し方形に整えてい

る（写真・3-4）ところにちがいがある。また、岩壁の高い位置に方形の穴をほり、ここに屍を晒す葬法は、スラウェシ（セレベス）島タナトラジャでも行われている葬法である。全く同形の墓があるからである（後掲写真参照）。

6　＜インドネシア＞スラウェシ島とバリ島の風葬墓

昨年(2001)年度来、私たちは文部科学省より科学研究費の補助を受け、近隣アジアの、とりわけ島嶼を共同で調査研究している[12)]。既に台湾島およびその離島、琉球嶼・緑島・蘭嶼島と、韓国および済洲島、インドネシアのスラウェシ（セレベス）・ジャワ・バリ・ロンボク・スンバワ各島の予備調査をおえている。

この調査で昨年8月中旬から下旬にかけて、バリ島とスラウェシ島を踏査したが、スラウェシ島中部の山岳地域・タナトラジャ県ケテケス（Kete Kesu）村で、風葬墓に出会うことができた。永年、奄美・沖縄諸島の風葬跡をいくつも見てきた私にとっては、まことに驚きであった。

この村を訪れたのは、昨年(2001)の8月21日。ムラの前面（北側）に田圃がひらけ、ムラの背後（南側）は断崖になっている。その断崖の下の窪みに大きな木棺があり、その上に数個の髑髏が置かれていた。水牛の形をした木棺の中で晒した屍が白骨化して頭蓋骨だけが内部からとり出され人目にふれるように、いわば「飾られた」のである（写真・5）。おそらく同時代を共に生きたムラびとなら、これらの髑髏が誰であるか、一目瞭然であったにちがいない。生者は、いつでも、死者に会えるという葬法である。別の崖下の窪みにも髑髏が置かれていた。これらは、いずれも崖葬墓である。

その脇に階段状の道が断崖の中腹まで続いている。この道を昇って行くと、自然の洞窟があった。それほど深い穴ではないが、ここにも棺があり、その奥には晒された人骨が積まれていた（写真・6）。洞窟葬墓である。

この崖葬墓や洞窟葬墓は、南西諸島と全く同型のものであるが、この村では現在もなおこれを墓所として使用している。

トラジャ県の別の村「レモ」でも、断崖に掘られた方形の墓はムラの背後の高い位置にあって、ムラを見おろしている。死者たちは、生者の身近にあって、常に生者の対話に応えているようである。この断崖の人工掘墓（写真・7）は、沖縄・下運天の「百按司墓」と同形だが、墓前の桟敷に、ここに葬られた死者たちの等身大の人形が置かれている。顔もそっくりだという。これを「タウタウ」というが、ムラには、このタウタウを造る職人もいる。

前述のケテケス村の風葬墓は、共同墓地のようであるが、このレモの断崖掘さく方形墓は、1穴を1軒の家が所有しているという。遺体をこの人工穴に入れて晒すというからこれもまた風葬墓である。身分の高い家の墓が、断崖の高い位置に造られているという（2001年8月22日訪）。

ところで、前述のケテケス村は南側が風葬墓のある断崖で、北側は平地になっている。ここに、東から西へ向けて、木造高床式の舟形家屋が2列になって並んでいる。10棟あった。この舟形家屋をトンコナン（Tong Konan）という（写真・8）。現地のトラジャ人の語るところでは、彼らの先祖は舟でサダン川をさかのぼりこの地にやって来て、舟に柱をつけて家にしたのが舟形家屋の由来だという。竹ぶきのそりかえった舟形屋根は、まことに優美である。村にはほかに15棟ほどの米倉があった。アランという。トンコナンよりはるかに小さいが、沖縄・奄美の高倉によく似ている。

〔ケテケス村の葬礼〕

私たちが訪れた日は、ちょうど葬儀が行われていた。5日間続けるというから、前日から既に葬儀が行われていたのである。ムラの北西に岡辺があり、ここに死者を入れた館（やかた）（トンコナン）が建っている。その中央に棺があり、館の南側の窓には、死者のタウタウがすわっていた。眼鏡をかけた老人で、死者にそっくりだという（写真・9）。死者は76歳の男子。

黒い衣裳をつけた人々が長い列をなして、村の中央部を通り、このタウタウの近くに至ると、互いに手をつなぎ輪を成して左に廻りながら葬送歌を歌っておどる（写真・10）。悲しい響きは全くない。15分ほどおどると人々は、死者の館（やかた）に拝礼することもなく散会する。そしてまた、新たに、別の葬列の一団がやってくる。こうして、各村ごとに訪れては、おどって散ってゆく。列の先頭に楯と槍を持った男がおどりながら先導し、そのすぐあとに美しく着飾った少女がつく。つづく会葬者の大半が黒い衣裳を着けているのも注目すべきである（写真・11）。

こうして、3日ほど葬客の来訪を受け、4日目の8月23日、館の前で水牛の屠殺が行われた。トラジャでは、水牛が最も高価で家宝とされる。死者と生前、最も縁（えにし）の深かった人々が、よくふとった立派な水牛を館の前に運ぶ。1時間ほどで17頭が運ばれたが、うち12頭がまたたく間に殺されて、いけにえになった（写真・12）。水牛は神の使者で、死者の霊（みたま）を天国へ運ぶと考えられているからである。屠殺に使う刀は、長さ20cmほどのナイフで、この作業に従事するのは、この水牛を最もいつくしみながら育てた飼い主だという。

かくて、この「血の惨劇」をおえた翌日、館の死者は、お棺ごと台にのせて、前述のムラの南側の裏山に風葬されるのだという。遺骨そのものを手厚くまつる風習は全くないという。したがって、仏教でいう墓参などはないようである。

それにしても、驚かされるのは、このような死の儀礼をおえてほうむられた死者が、じつは数年前既に死去していたという事実である。しかも、入棺したまま、家の中に置かれて家族と暮らしてのち、このような壮大な葬儀を行うというのだ。

調査に同行してくださった長崎国際大学助教授の細田亜津子氏の教示によると、死後17年目に葬儀を行った人もいるという。17年もの長きにわたって、この死者は「生者」同様にあつかわれ、家族と心ゆくまで対話をかわしてきたのだという。だから家族や親族は、死のい

たみや深い悲しみを充分にのりこえることができるのだという。ちなみに、家屋の中に石棺を仕込み、ここに死者を葬る習俗は、台湾の先住民にもある。

トラジャの葬礼でいけにえにされた水牛や豚・鶏などの肉は、貴重な蛋白源で、会葬者全員に平等に分配される。これが共生社会の原則である。水牛の肉は干し肉に加工して保存されるという。

かくて、私たちは今年(2002年)9月、風葬され自然に腐蝕してゆく死者と、バリ島で初めて出遭うことになる。

〔バリ島の風葬〕

周知のように、ジャワ(Java)島の東にバリ(Bali)島・ロンボク(Lombok)島・スンバワ(Sumbawa)島が続いている。今年8月、これらの島々を踏査したのち、最後に再びバリ島を訪ねた。

バリ島は住民の8割がヒンドー教を信仰している。だが、ヒンドー教が伝わる以前から、この島に住んでいる先住民がいる。

この先住民を「バリ・アガ」という。島の東部のトゥガナン(Tenganan)村や北部のスンビラン(Sembiran)村など数か所の集落に住み、今もなお、「自然界や祖先を崇拝し、万物に精霊が宿るというアニミズムを信仰」している。

彼らの集落の中でも、先住民の独自の文化を最もよく守っているのは、トルゥニャン(Trunyan)村だという。それは、この村が他の地域から隔絶されているからである。現地での聞き取りによると、集落名Trunyanは、「香木」(Tru=木・nyan=香)に由来する。

バリ島北東部にバトゥル山(Bature 1717m)とアバン山(Abang 2153m)がある。その間にカルデラ湖がある。バトゥル湖(Lake Bature)という。周囲約11km。南北に長く、長さ約7km。中央部の幅は3kmである。この湖の東岸には4つの小さな集落がある。その最も北側の村がトルゥニャン(Trunyan)村である。バトゥル湖南岸の船着場ケディサン(Kedisan)から水上およそ5kmの位置にある。今年9月1日、この村を初めて訪れた。

トルゥニャン村の戸数は、およそ20戸ほど。湖岸にへばりついて人家がある。家屋は高床式ではなく、地面の上に直接建てられ、家敷の境界ははっきりしない。村の周辺に僅かばかりの畑地があり、村の背後に迫る山陵を開墾して棚状の畑をつくっている。

村から北へ約1.5km離れた湖岸に小屋が5〜6軒ある(写真・13)。葬儀の折りに使用するのであろう。その小屋の南隣りのジャングルの中に風葬墓がある。入口にはヒンドウ寺院に似た石造の門柱があり(写真・14)、その奥に階段状に、3段に石を積んだ石造物がある。その上段中央にとがった石を立て、その下の段(2段目)に40個余の髑髏が置かれていた(写真・15)。この髑髏は明らかに死者の墓標である。

されこうべを家屋の脇に置く風習が台湾の先住民にもあり、これにはさほど驚きもしなかったが、何よりも私たちを驚愕させたのは、その北側のジャングル内の斜面に死者をそのまま置いて晒していたことである。

遺体は5体あった。その上に細い竹を屋根状に組んで立ててあるだけだから、死者の姿がよく見える。竹がこいは、長さ約2m。幅約80cmぐらいである。いずれも頭部は毛髪のついたまま残されているが、腹部から腰・脚部分は腐蝕して骨と化し、その上に死者の着た服が切れ切れになって残っていた（写真・16-17）。

北端の遺体は若者だったようで、鞄をだいたまま白骨化していたのが痛ましい。死者たちは完全に白骨化すると、如上の階段に髑髏だけが飾られ、遺骨は全部捨て去られるのであろう。

彼ら先住民の葬礼の実際や村落構造などを調査する余裕のなかったのが遺憾であるが、彼らの日常の主な生業が湖での漁業であることを付記しておきたい。

ただ、その漁業とて、極めて原始的で、2mほどの丸太をくり抜いて造った丸木舟で、釣りや投網・刺網漁を行っているにすぎない（写真・18）。だから、生産高は低く生活は貧しい。この村の背後の山麓を湖畔東岸のアバン（Abam）村まで獣道（けものみち）のような細い道が通っているようだが、彼らの主な交通手段はこの丸木舟である。渡来者の築いたバリの広域社会とは、ほとんど隔絶して生きているから、言語も通じない場合が多い。だが、彼らは素朴でじつに明るいのだ。そんな人間の本然的な明るさは、どこからくるのであろうか。病みおとろえはじめた「文明人」は、このことを十分に考えてみる必要があるだろう。

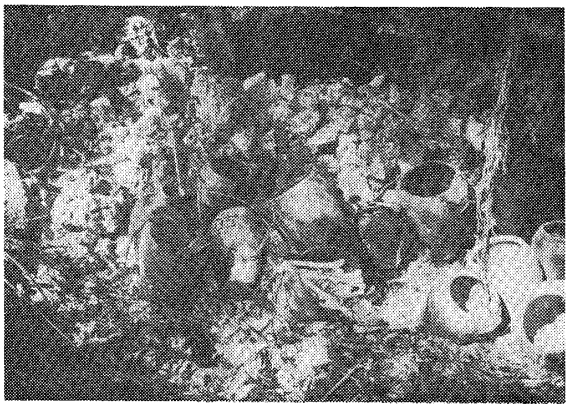
あとがき

バリ島トルゥニャン村の風葬墓は、極めて衝撃的であったが、ただ、いえることはバリ島先住民の彼らも、死者を忌みきらう存在として、生者の世界からかくし、ほうむり去るのではなくて、永い時間、生者の対話の対象として死者を存在させているということである。それは、生者に絶えがたい死の悲しみや悼みを断念させることではなく、永い時間をかけて生者が死者の「死」を自然に納得し、それを超えるという精神的なはたらきがあるように思う。スラウェシ・タナトラジャの葬法も同じである。

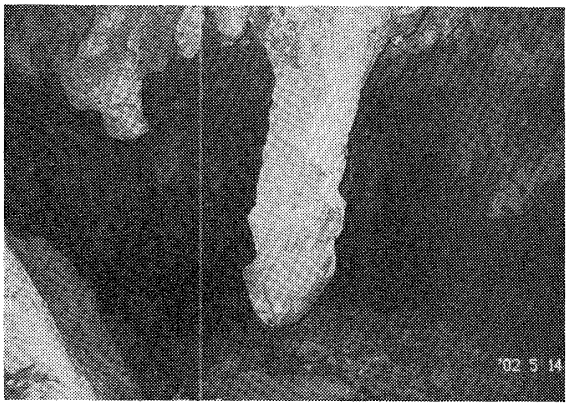
沖縄では、先進国中国の文化が渡来してのち、風葬をやめ、亀甲墓に変えた。だが、「しるひらし」といって、期日をきめて墓の入口をあけ、死者と対話し、その腐蝕の状態をも確認したという。白骨化する前は、死者の魂は生者と交信できるという考えがあったようである。如上のインドネシアのスラウェシやバリに通ずる観念である。

ここでは、以上を記すにとどめる。本来、南西諸島とインドネシアの葬法や島民たちの死生観なども、比較検討する予定であったが、このことについては、後稿にゆずる。

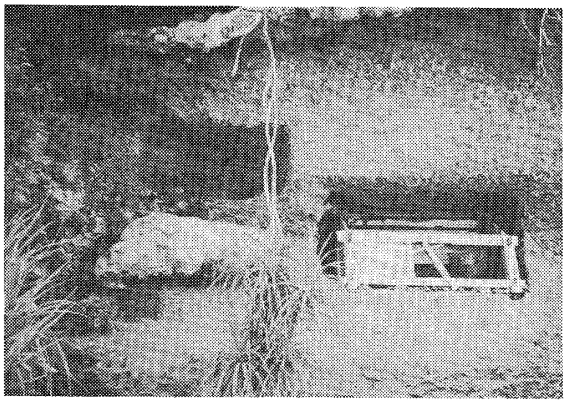
〔参　考　写　真〕



写真・1　玉泉洞西側の崖葬墓（沖縄）

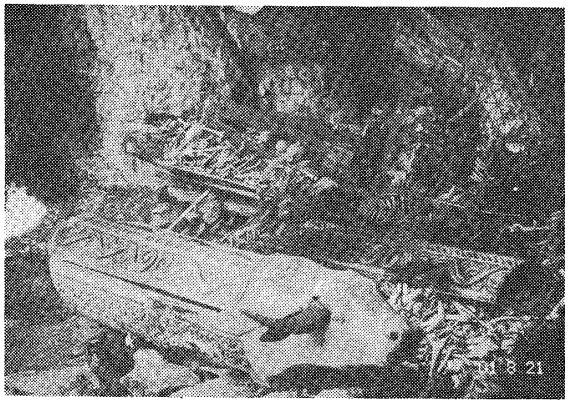


写真・2　珍珍洞の鍾乳石（沖縄）

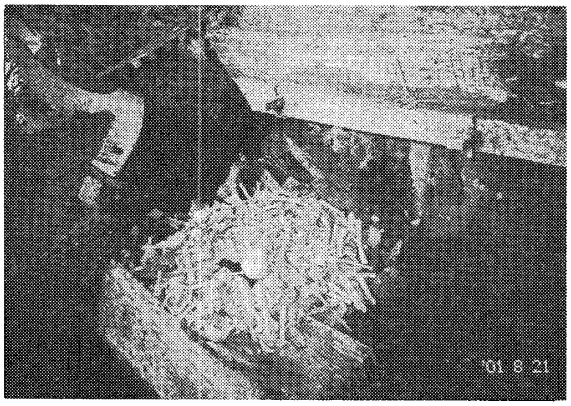


写真・3　百按司墓（沖縄）

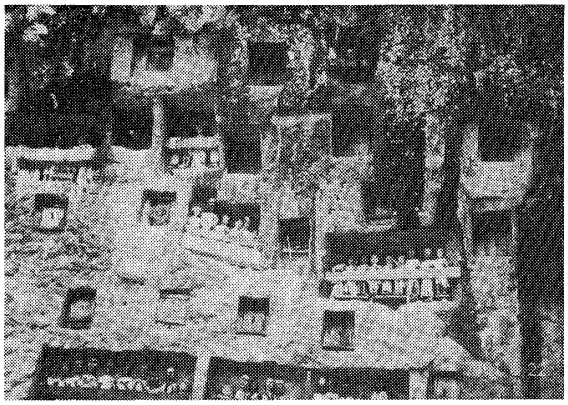
写真・4　百按司墓内部の骨壺（沖縄）



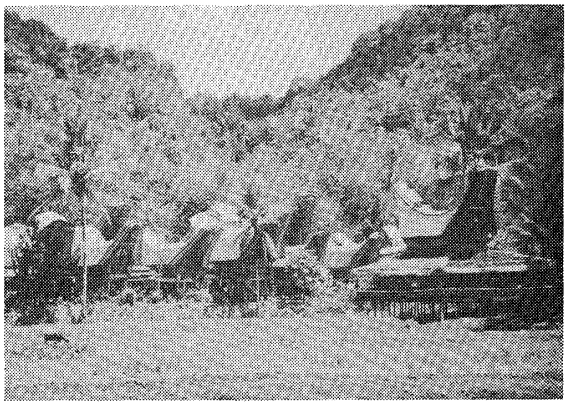
写真・5　ケテケス村の風葬墓（スラウェシ島）



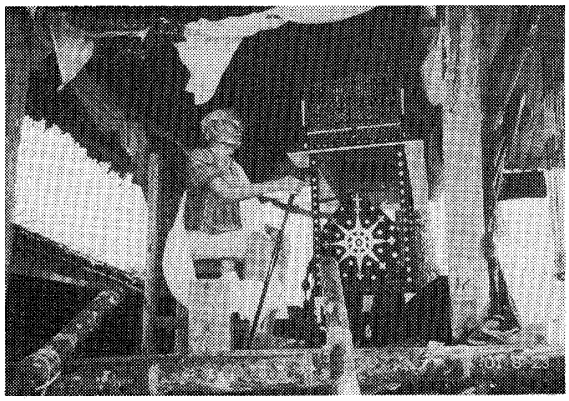
写真・6　ケテケス村の洞窟墓



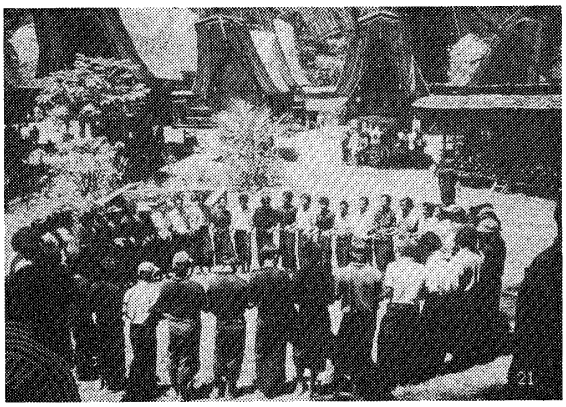
写真･7　レモ村の人工掘墓とタウタウ
（スラウェシ島）



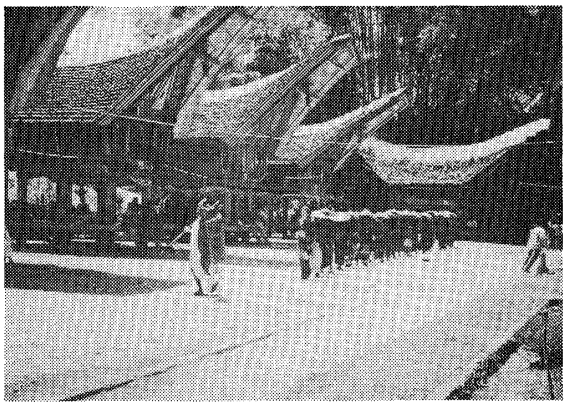
写真･8　ケテケス村のトンコナン
（背後の山の左側が風葬墓）



写真･9　葬者のタウタウと木棺
（ケテケス村）

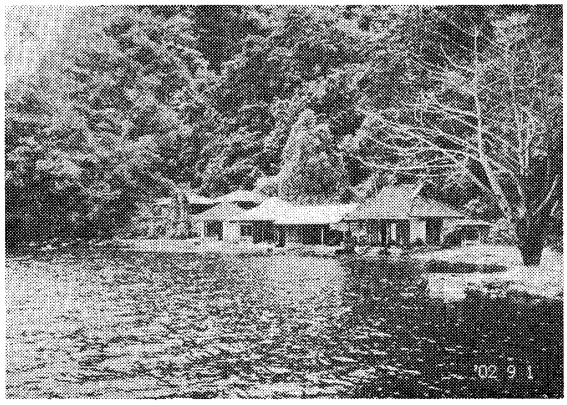


写真･10　葬送歌を歌って舞う（ケテケス村）

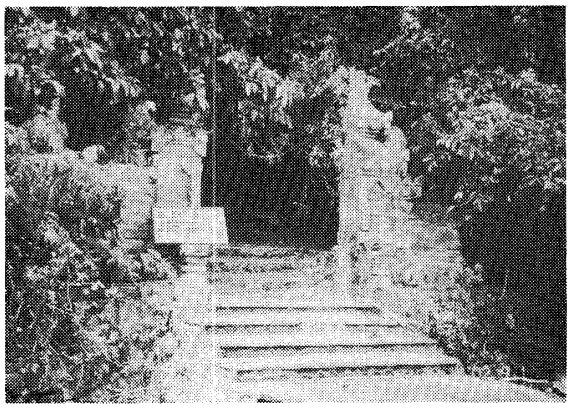


写真･11　先導者と少女につづく葬列
（ケテケス村）

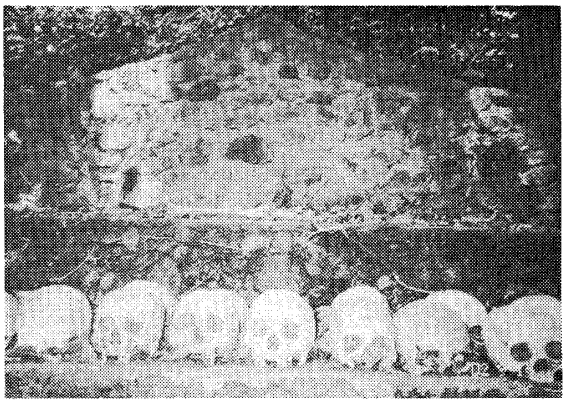
写真･12　生贄にされた水牛（ケテケス村）



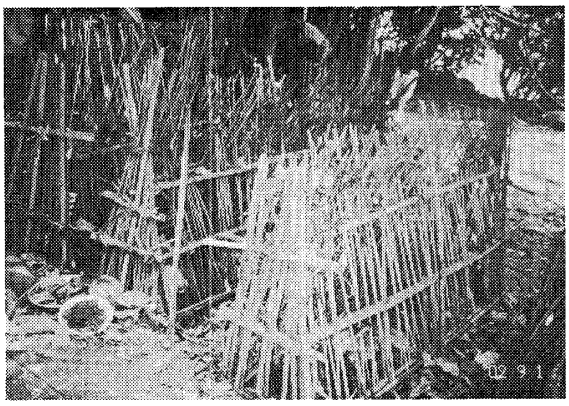
写真･13　トルゥニャン村の墓所（バリ島）



写真･14　墓所入口の門（トルゥニャン村）

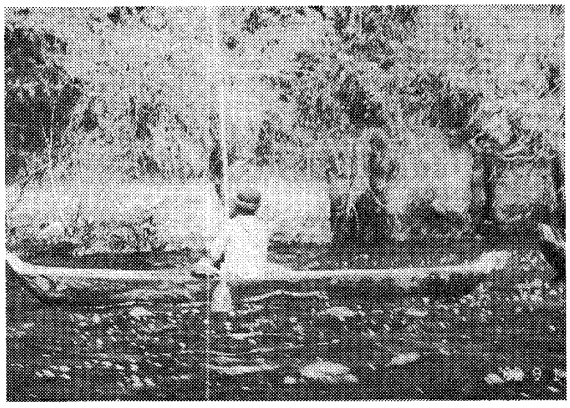


写真･15　トルゥニャン村の風葬墓



写真･16　トルゥニャン村の風葬現場

写真･17　風葬された遺体（トルゥニャン村）



写真･18　バリ・アガのくり舟による釣り
（於、バトゥル湖）

注

1）坂本百代「社会的事件としての言語の誕生」（『日経サイエンス』第24巻第10号・1994年10月発行）
2）大林太良『葬制の起源』（角川書店）
3）井尻正二・湊正雄『地球の歴史』付表（岩波新書）による。
4）この事件については、1987年4月立風書房刊『現代民話考』第二期・Ｉに短文を記しておいた（同書P.273参照）。
5）架蔵の写本（大本）によった。
6）「奄美郷土研究会報」第20号（1980年3月発行）所載による。
7）この事件についても、「民話の手帖」第11号（1982年10月発行）に短文を記しておいた（P.79-P.80）。
8）1999年9月17日、現地在住の寛山茂介・寛山雪子両氏の案内で現地を調査。「トーチバカ」も両氏の教示による。往年はこの辺りの崖葬墓に頭蓋骨が無数に置かれていたという。
9）「徳之島の岩屋葬」（名著出版『葬送墓制研究集成』第一巻所収）。
10）東喜望校注・東洋文庫411．428『南嶋探験』1・2。
11）1994年度－1996年度、3年間実施。
科研費〔基礎研究A－1〕。課題「沖縄県八重山の総合的研究」
12）2001年度－2003年度の3年間実施。
科研費〔基盤研究B－2〕。課題「琉球列島における社会的文化的ネットワークの形成と変容に関する研究」
＜研究分担者＞安江孝司（代表・法政大学教授）・飯田泰三（法政大学教授・法学博士）・東喜望（白梅学園短期大学教授）・我部政男（山梨学院大学教授）・細田亜津子（長崎国際大学助教授）ほか
＜研究協力者＞川口重雄（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）・中本謙（同研究所奨励研究員）・大浜郁子（同研究所奨励研究員）・鈴木貫樹（法政大学大学院博士課程）

（2002年11月20日脱稿）

あずま　よしもち（民俗学・文学）